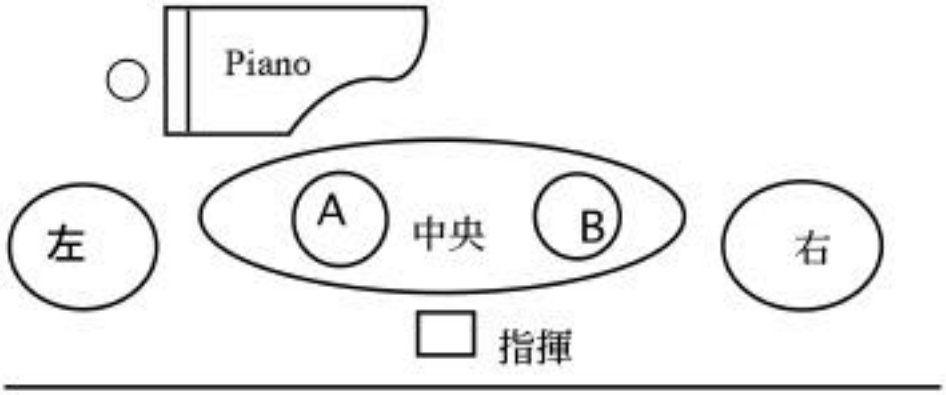
「紛れ野の家（うづ）」
－木村迪夫の詩による男女複数の声とピアノのために

４篇の詩『祖母のうた』『むら・幻・方法』『うたのわかれ』『夢』が交錯しながら同時進行する

ピアノ・パートはドビュッシーの『雪は踊っている』（『子供の領分』より）と中国古琴曲『搗衣』（出征した兵士の妻が砧を突きながら夫を偲ぶ）にもとづく



声は男女の別なく中央・右・左の３群にわかれ　中央群のなかにさらにＡ群とＢ群が含まれる
声の部分は５線１段に書かれ　自分の声にあわせて適当なオクターブに移す　２声部以上なら適宜配分する　男（女）は男声を主に　少数の女声　女（男）ならその逆　男声だけ女声だけを避ける

日常的・非「声楽的」声は　語り・唱え・うたう
指揮記号　◯ 主拍　| 拍　◡ 半拍　（拍の長さやテンポは変更自由）

ユニゾン（同時同音）は原則としてなし　フレーズをだれかがはじめ　他の声は一瞬おくれてはじめ一瞬遅れて終わる　その途中では　ちがう声の音色が次々に表面に出るようにする　滝から落ちる水粒が次々に光をうけてきらめく　あるいは綴れ織りや錦のイメージ
音程やリズムを揃えない　各自がいちばん美しいと思う音程やことばに対して適当と思われるリズムを取りながら　協力して全体をつくることによって複雑な肌理が創られる

高橋悠治

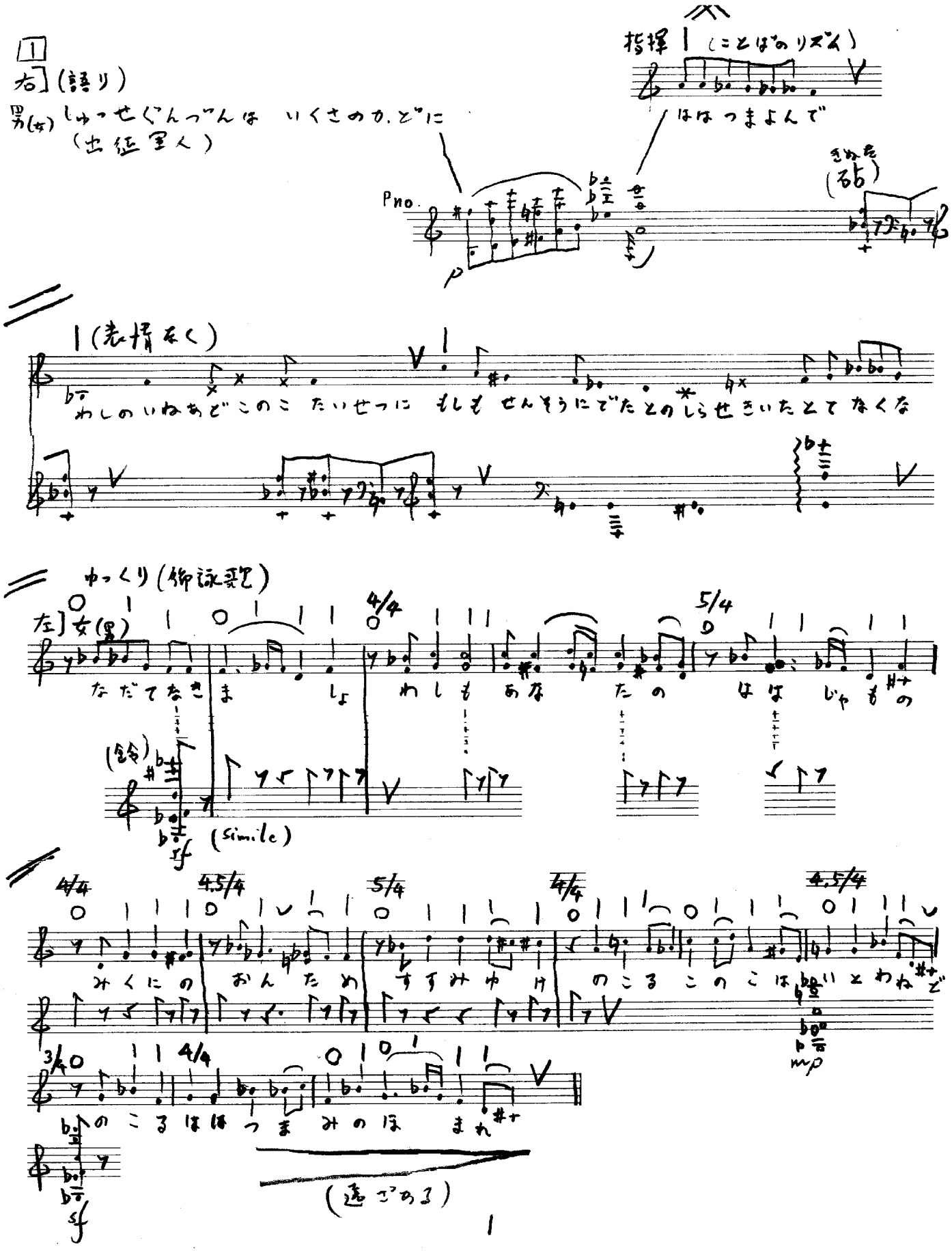
２００４年８月２０日

紛れ野の家（うづ）

木村迪夫の詩による男女複数の声とピアノのために

２００４年８月

高橋悠治



(ピアノとは別な時間)

2

中央]

(Simile)

ゆき 降り ゆき

Pno. (Debussy: The Snow is dancing)

(ことばのリズム)

舞い ゆき 落ちる なら せ の 終ることなく始まりのない絶唱のしずけさの中で

崩れさるときと近づく足早な未来のかげとの面目に触れあう激しい時間

(視時) (影)

Pno.

2群に分れて

Ⓐ群 Ⓑ群 Ⓐ Ⓑ 全員

予期もなく (予期のごとく) 予期もなく (誰もがさらに予期したごとく) おと

p subito

ゆきの〈交響〉 聴こえるか

Pno.

3

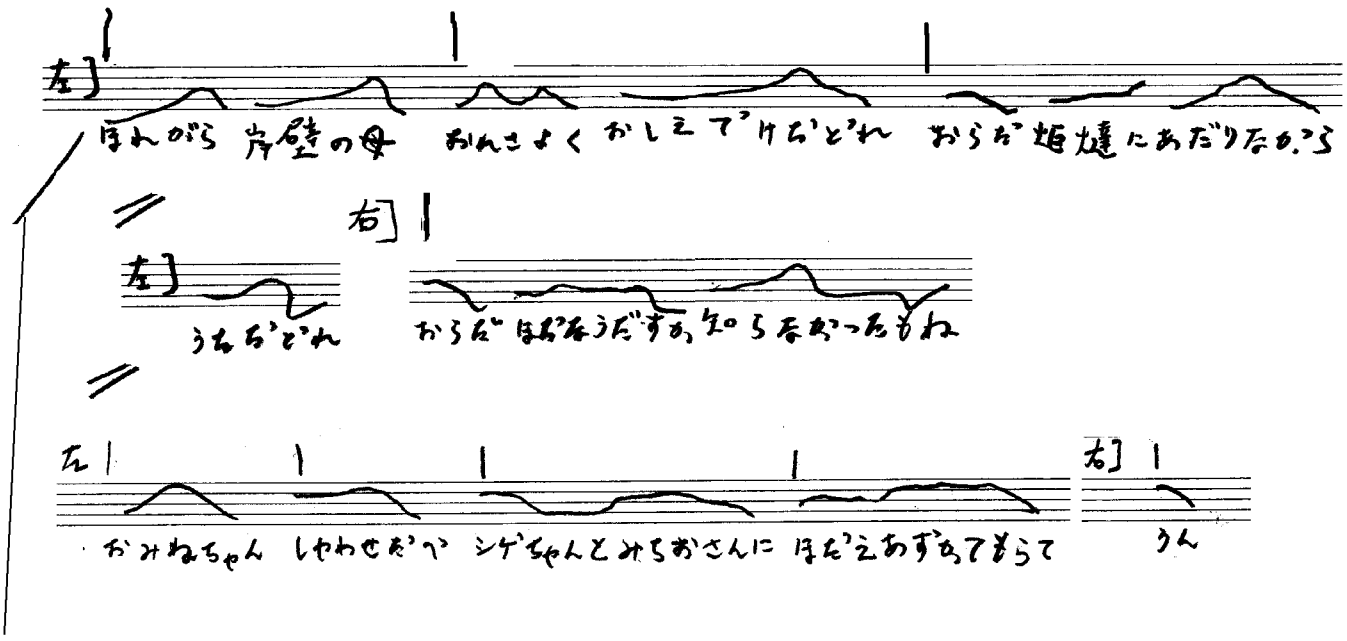
左] 男/女

おみねちゃん ほなえげんきだった 顔いろもええぶん うだうんてみろ

右] 女(男) (かいてを音高で)

(低く聞こえない声)

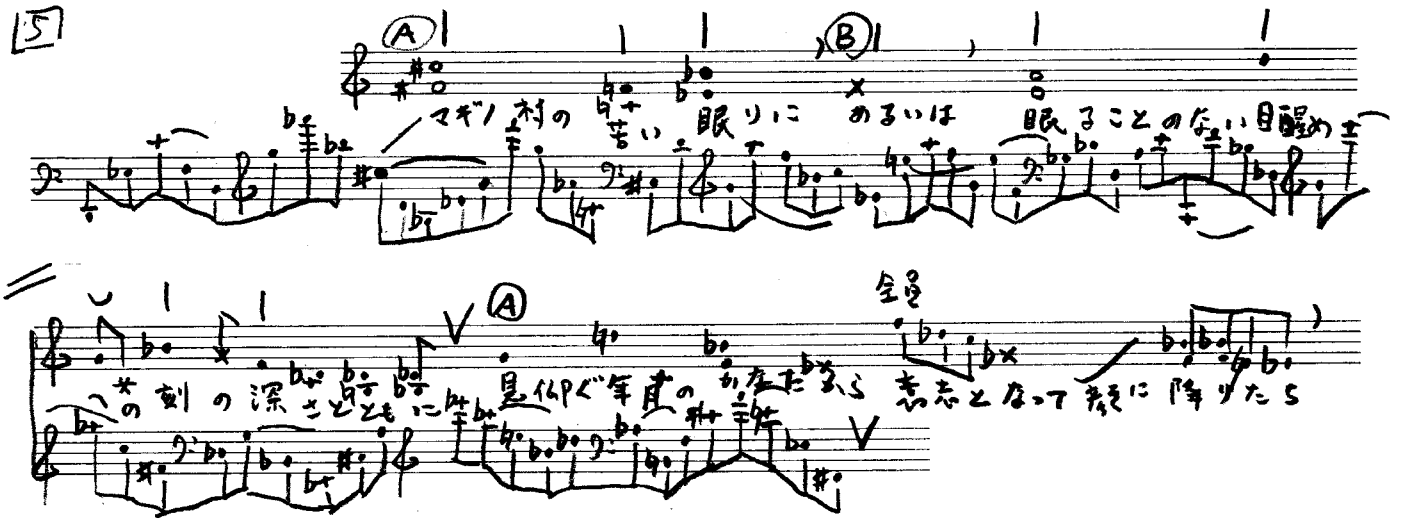
あ あ あのかおで あの こ で てがら なのむと つまや子 ろっ

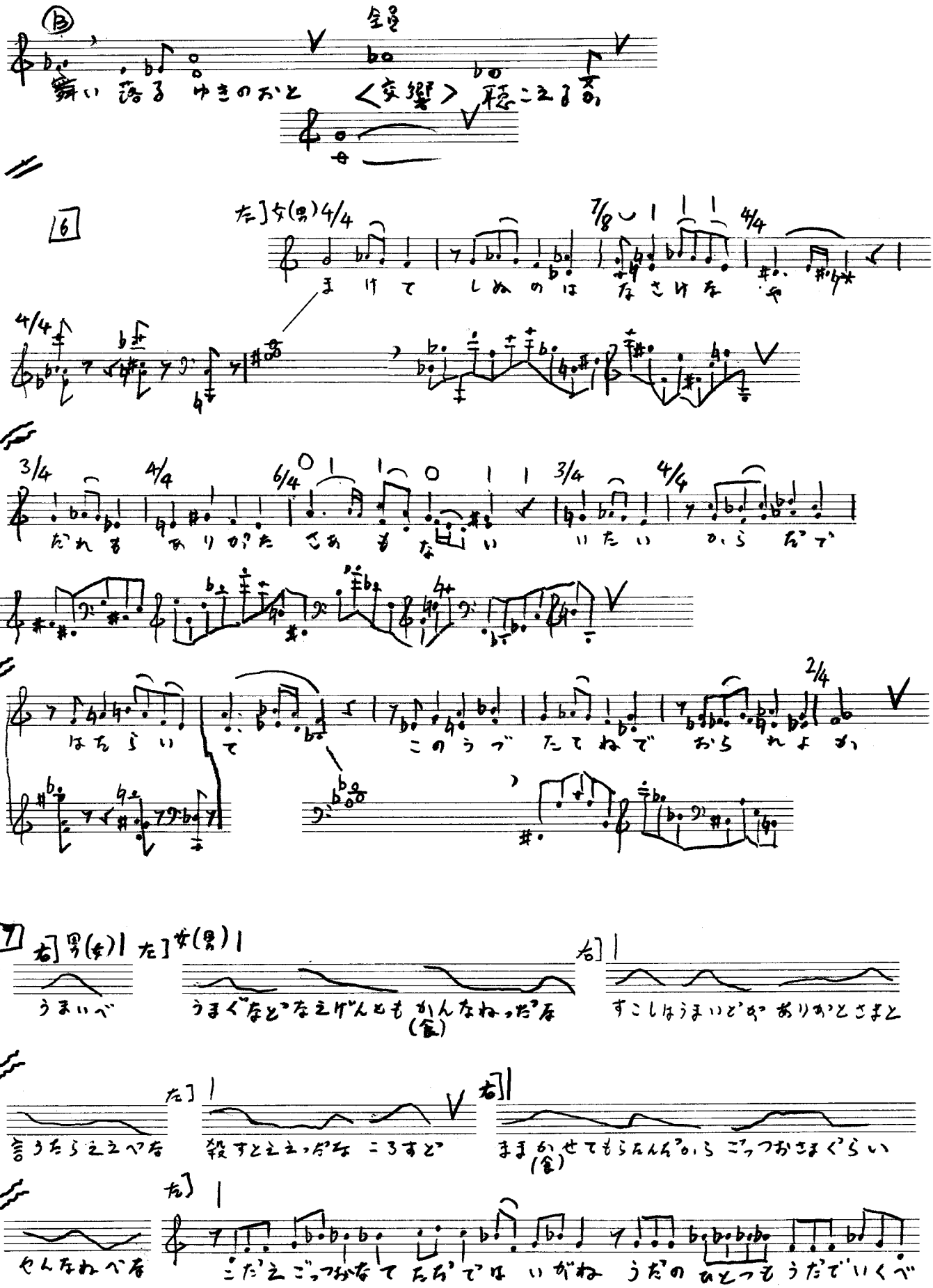


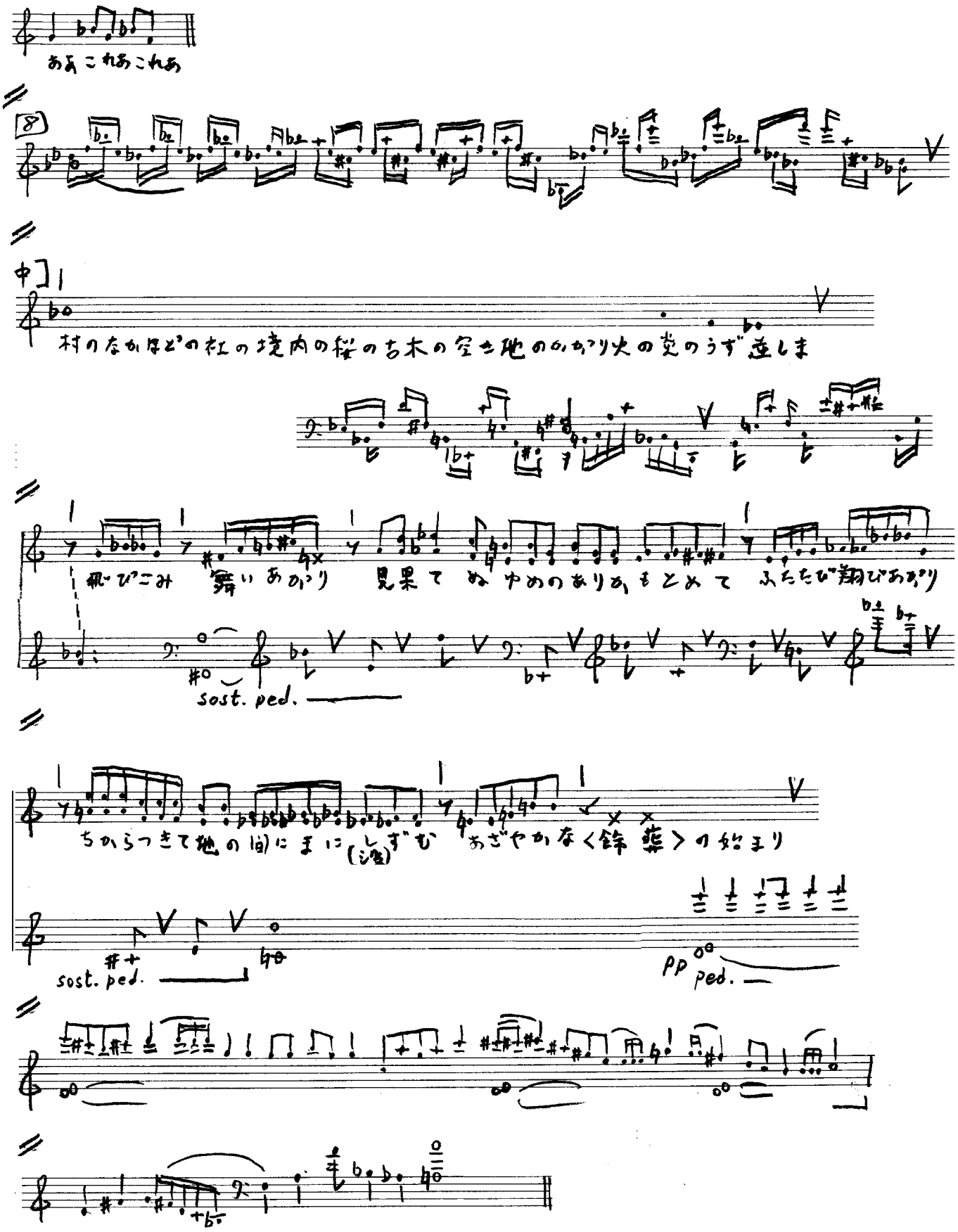
4 [中央後よりはいり だんだんにひろがる]

わたくしは　めいじ四十四年四月十五日　まえの中川むら足ノ口ぶらくののうかに生まされてもらい一年二年とあたたかいお母さんのてでかわいがられ　七ツのとしまでそだてあげられましたが　七ツのときにお母さんはなくなりました　わたくしもくろうし　父もくろうして　とてもお父さんだけではわたくしたちをそだてあげることはできませんので　まま母をもらい　たにんのつめたいお母さんにそだてられ　ようやくがっこうにはいり　あとお母さんにはこどもがたくさんうまれたから　がっこうにいくときもこどもをおんぶしていったり　てんきのよいときにはひまをいただき あめがふったときにはよいなどといわれて　さいほうやいろいろな本をもってがっこうにいって　先生から　てんきがあがっていそがしくなりましたから　ひまをくださいといってしかられたり　おまえはそんなにさいほうや本をたくさんもってきて　べんきょうがいやになったのかといわれたりして　ようやく六年生まではいってそつげようしました

最後のほうでしだいに弱く
5 に変わっていく




Ⓑ
全員
舞い 落る ゆきのおと
<交響> 積こえる雪
6
左]女(男) 4/4
7/8
4/4
まけて しぬのは なさけな や
4/4
3/4
4/4
6/4
3/4
4/4
だれも ありがた さあ も な い いたい から だで
はたらい て このうづ たてねで おら れよ が
2/4
7
右]男(女)
左]女(男)
右]
うまいべ
うまぐなどなえげんとも かんなねっだな
(食)
すこしはうまいどが ありがとさまと
左]
右]
言うたらええべな
殺すとええっだな ころすど
まま かせてもらんねっから ごっつおさまぐらい
(食)
左]
やんなねべな
こだえごっつおなて ただでは いがね うだの ひとつも うだでいくべ


ああこれあこれあ
8
中
村のなかほどの杜の境内の桜の古木の空地のかがり火の炎のうず逆しま
舞びこみ 舞いあがり 見果てぬ ゆめのありかもとめて ふたたび翔びあがり
sost. ped.
ちからつきて地の面にまに(泡)しずむ あざやかな〈鉢 華〉の始まり
sost. ped.
pp
ped.

[9] 右]

女(男)

しろきいはいのまえにでて　もみじのようなてを

あわせ　おっちゃんかたきはアメリカと　ほんにアメリカてきじゃもの

Ped.

左]女(男)

ふたりのこどもをくににあげ　のこりしかぞくは

なかぎぐらし　よそのわかしゅうみるにつけ　うづのわかしゅう

いまごろは　さいのかわらで　こいしつみ

(ことばのリズム)

打ち鳴らす梵鐘をもたない

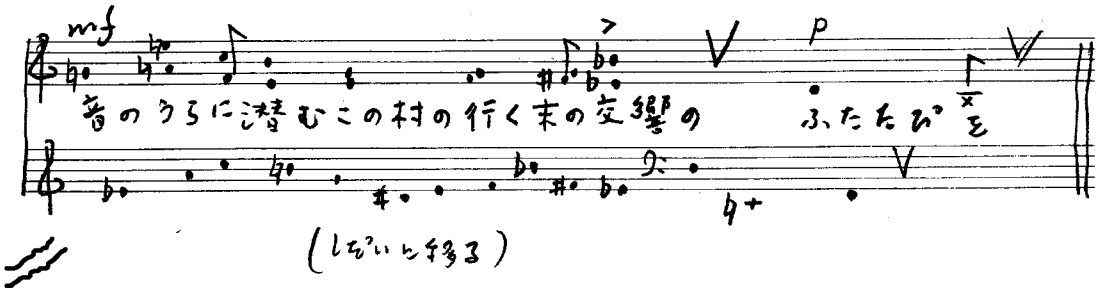
→(ped.)

sf　mf legato

村びとよ　鐘口でいい　小さすぎる　祠の屋根に吹きつもるとき　(現時)　ときどの

せめぎあいに向って　打ち鳴らせ　腔の底から打ち鳴せ　そして聴け

sf　sf　mp



11 右]

そしてままお母さんとお父さんと一生けんめいにはたらきつづけましたが

(語り)

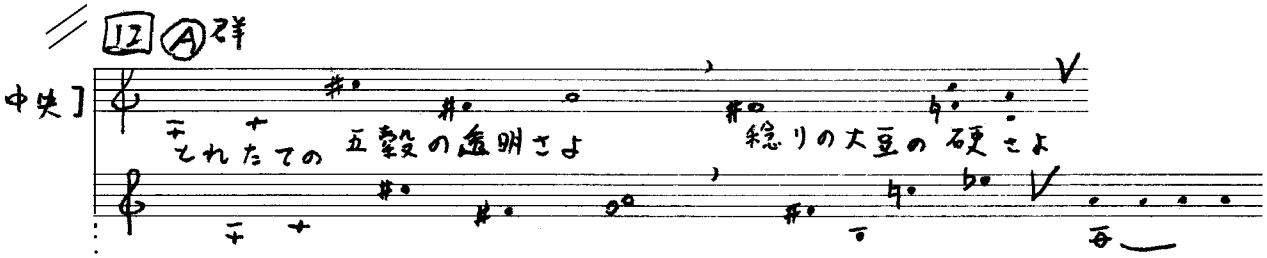
女としては一番にきものです　何もかってもらわずにただ何年もはたらきつづけて

ようやく十九さいになりました

十九さいの年にままお母さんのあねの家によめにくれられました

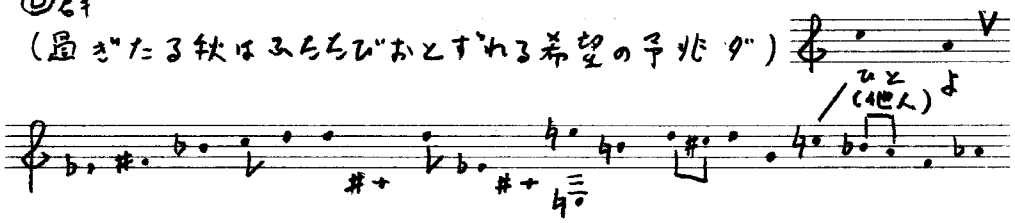
(語り)

きょうだいだからきものもかってくれなくてもよいといってくれたのです
そして一年二年とたち女の子供がうまれました　春にうまれて冬の一月ころに
夫がげんえきでへいたいにとられいよいよ今日は家から出ていかねばならなくなった

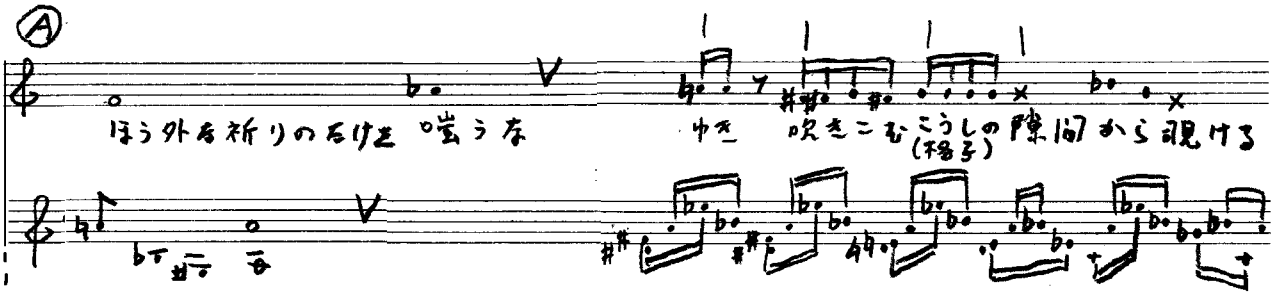


右]そのときわたくしはなんていったかわからない　夫が出ていったあとは

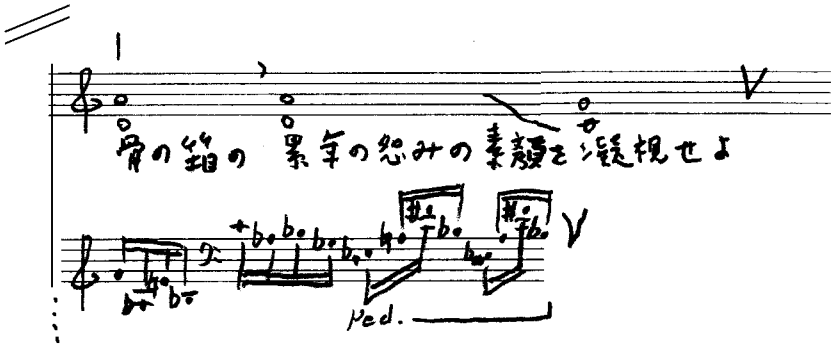
Ⓑ群



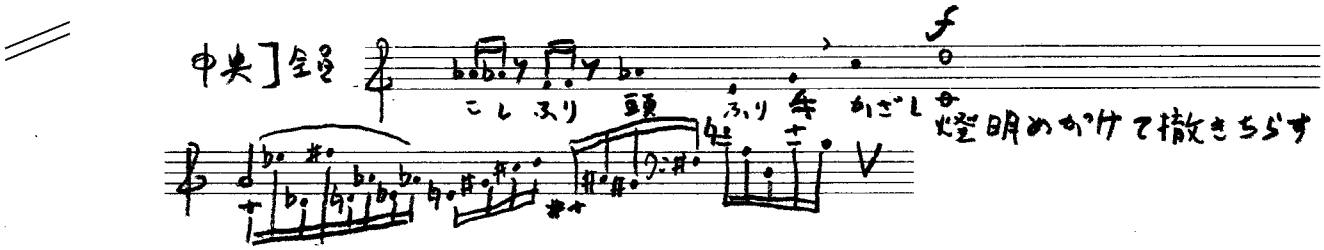
右]あっちへいってなき　こっちへいってはなき　ただ心さびしく



右] なくばかりです こんなことだったら一年半はどうしてくらす　　しかられながら



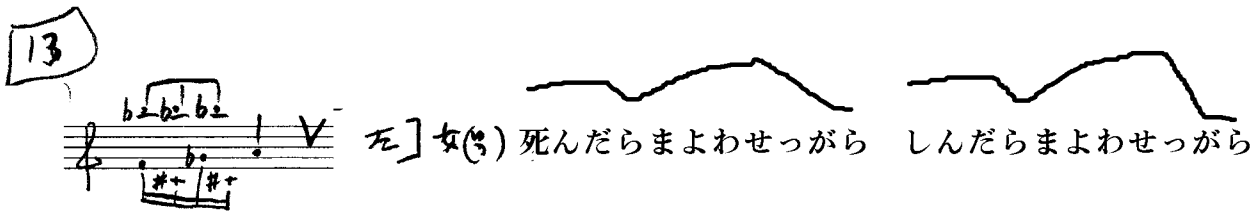
そうしておしゅうとさんとはたらきつづけるのです　月日のたつのははやいもので



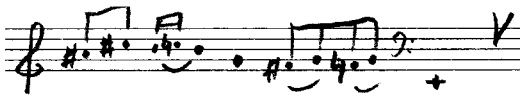
そうしているうちようやく一年半もたってかへってきたといって よろこんで

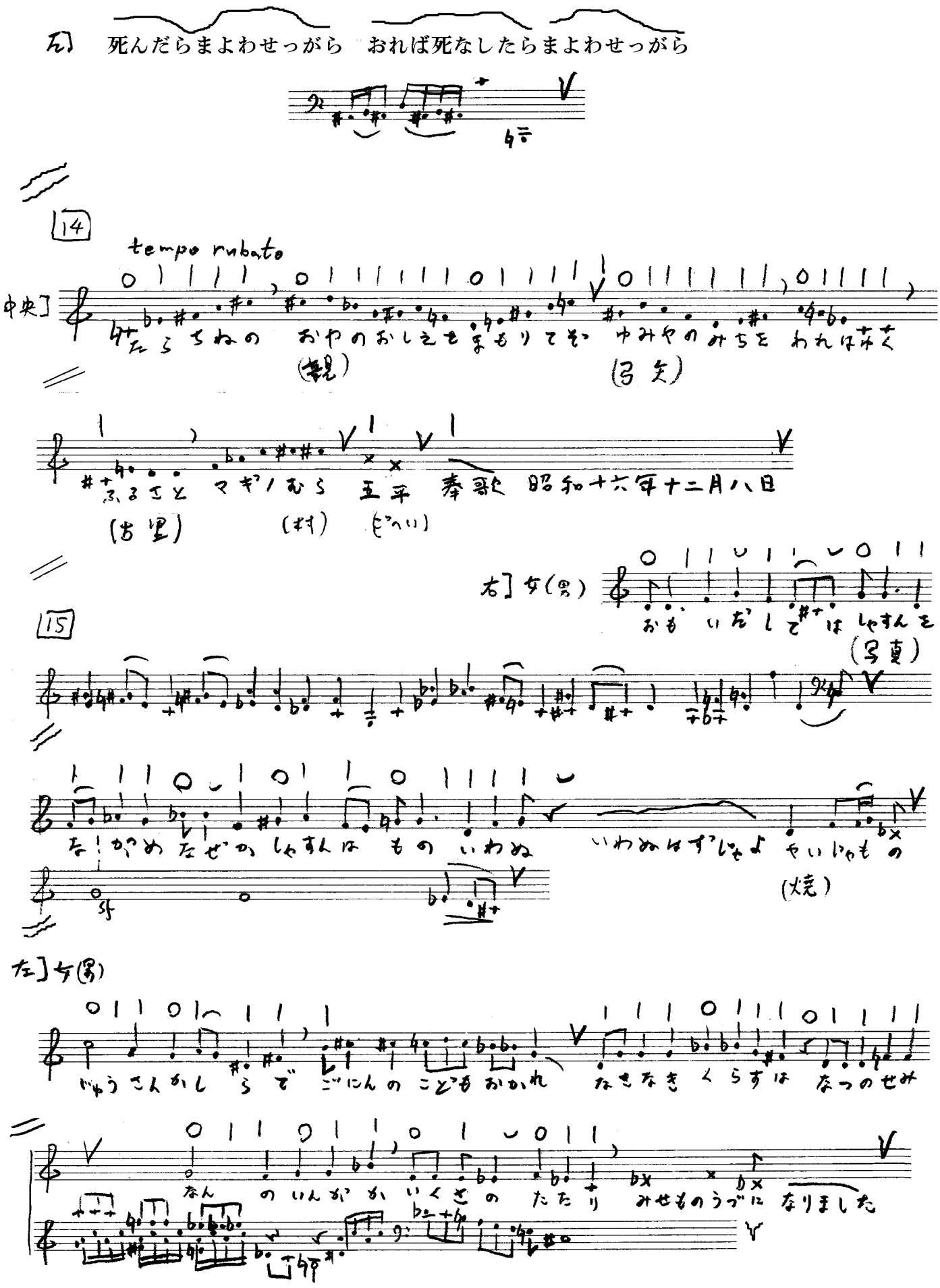
右] 二人ともせっせとはたらくことができました　また秋になるとよび役だのこうび役だの
)といってまたゆかねばならない　子供は三人となり　いってくるとまたもしょうしゅう
れいじょうの ゆう　あかいかみがきたといって心さびしくなり　なくばかりです

[中央] と右] 両方終わるのを待って]



右] 男(女) こだえあずがて　なしてまよわんなねんだよ　じゅみょうだべな



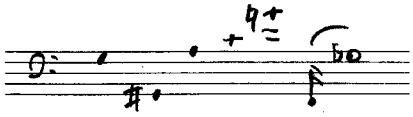

左] 死んだらまよわせっがら おれば死なしたらまよわせっがら
14
tempo rubato
中央]
なら ちねの おやのおしえを まもりてそ ゆみやのみちを われはゆく
(親)
(弓矢)
ふるさと マギノむら 五平 奉歌 昭和十六年十二月八日
(古里)
(村)
(ごへい)
右] 女(男)
おも いだして はしゃすんを
(弓夏)
15
なぜかめ なぜのしゃすんは もの いわぬ いわぬはずじゃよ やいいもの
(焼)
左] 女(男)
じゅうさんかしらで ごにんの こどもおかれ なきなき くらすは なつのせみ
なん のいんがい いくさの たたり みせものうづに なりました

14

右] 全員　　中央] Ⓑ

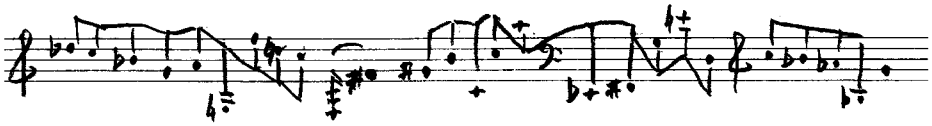
ようやくかへってきたといったら　　またしょうしゅう

左] 全員 またしょうしゅうれいじょうあかがみがきて



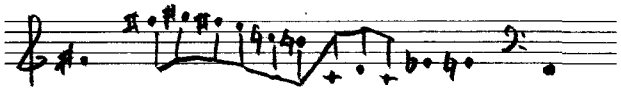
Ⓑ　　中央] 全員　　中央] Ⓐ　　中央] 全員

れいじょうがきたといって　さいごは子供五人です　すえの子はかぞえの二つであった　子供が五人め の時に



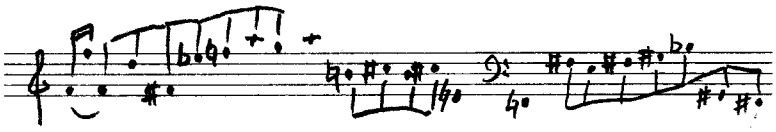
お父さんがしんでしまい　　左] 一生けんめいはたらきつづける

中央] Ⓑ いつもへいたいにばかりとられ



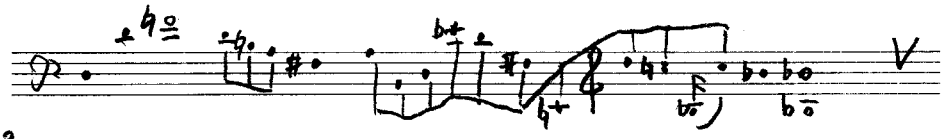
中央] 全員　　Ⓐ 自分のいのちよりも子供をたいせつに家

よその人にかがそんなにはたらくとはやくしぬぞといわれても



Ⓐ

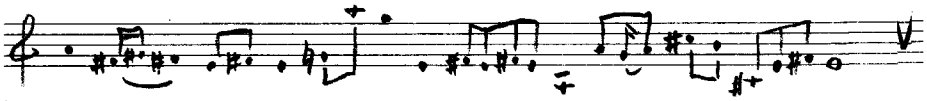
をたててゆかねばならない



中央] 全員

よそでは　となりほとりは皆んなそろってはたらきつづけて

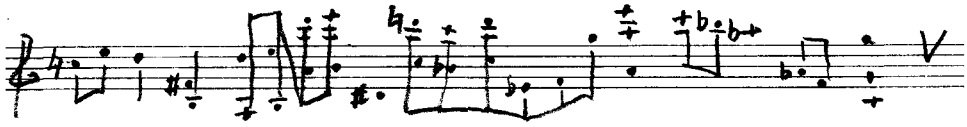
右] りっぱなせいかつをやっているのを見ると



右]

ざんねんでたまらない　　右] なみだとあせとふきながらはたらくのです

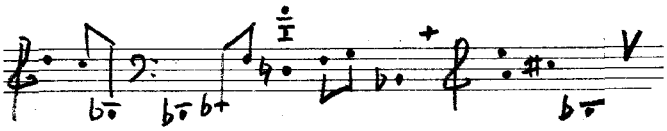
Ⓐ どうしてこんなにうんがわるく生れたのかとおもい思い



中央]全員

まえにはおしゅうとさん二人でまいにちまいにちわるくちばかりで

右] よるはとこの中で目のあくかぎりぐちばかりいわれ



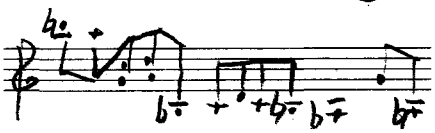
中央]全員

いくらねむっていたものでもすぐとなりのへやなものですから

Ⓑ すぐ目をさまし みのつまるようでした

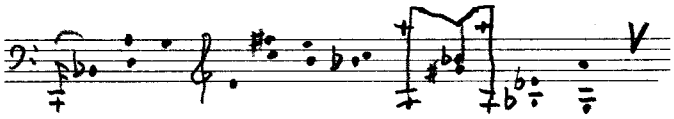
左] いくらわたくしが何もわからなくて出来ないからでもあるが

Ⓐなんとつらいことでやうと思い



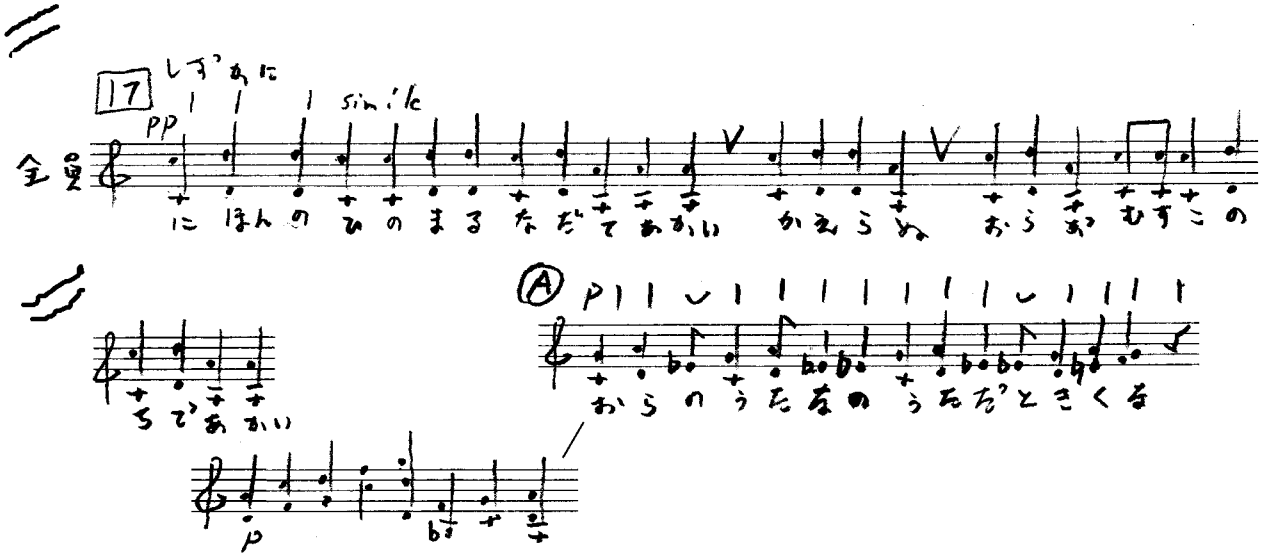
左]

よめにきてからただのいちどもわらったことがありません

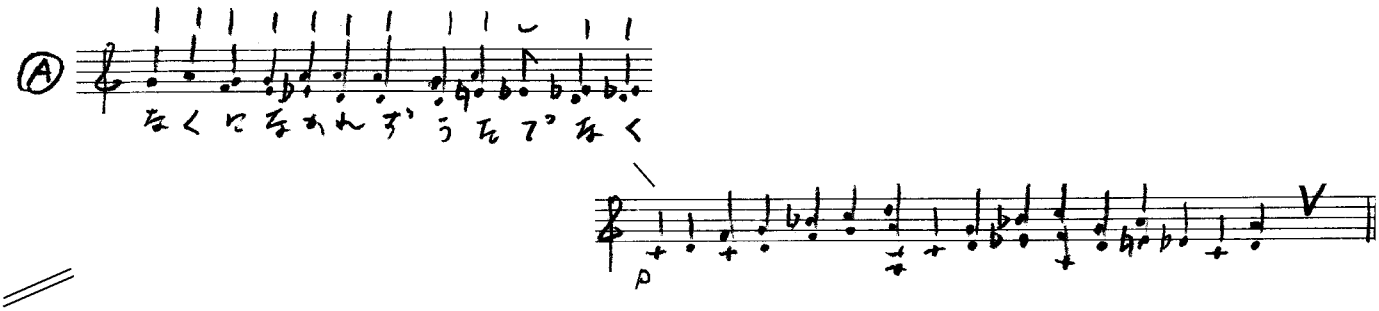


中央]全員

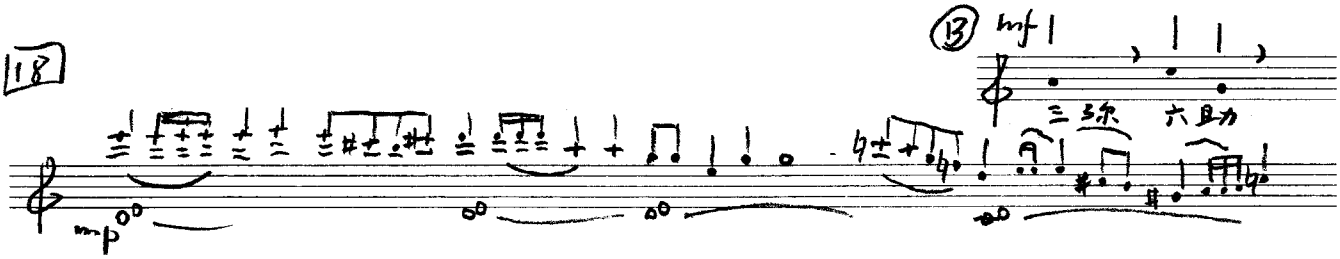
ただあさはくらいうちゆうがたもくらくなるまではたらくばかりでした

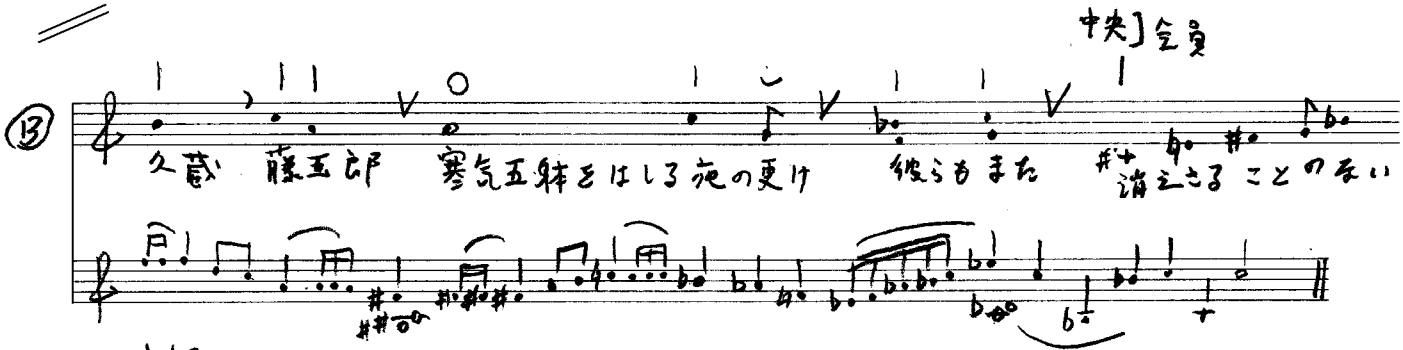


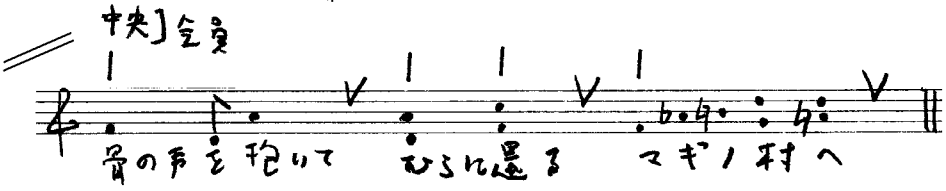
Ⓐ



18







19 右]ヶ(男)この畜生やろ

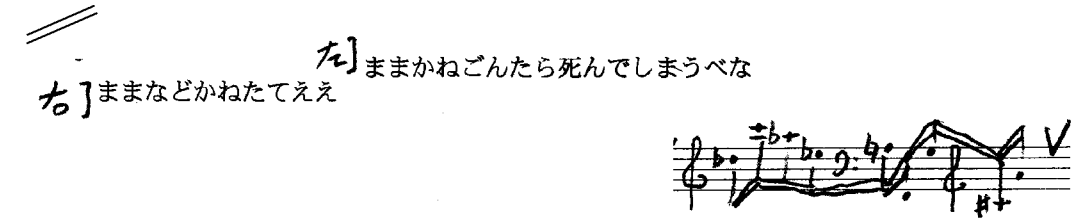
左]ヶ(女)おしめとり替えてやってるに 畜生やろうとはあんまえな

左] 口をあげろ　　左] 口あげねごんたら、まま（飯）かんなえべな

右] 口などあげね

左] ままかねごんたら死んでしまうべな

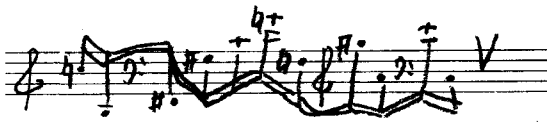
右] ままなどかねたてええ

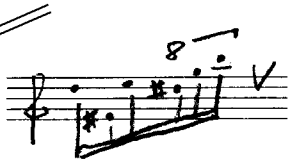


右] ままかねたて生ぎでみせる。おまえだの世話などならねたて、生ぎでみせる。

左] おまえだの世話などならねなて、げんに世話なて生ぎでっどれ

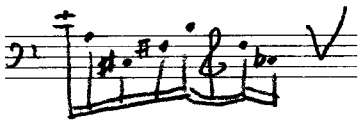
右] けっして死なねえぞ　しなねえぞ





中央]
Ⓐ 君達 まま（飯）だから　口をおおきくあげろ

君達 Ⓑ ほだえ口あげろ口あげろと言うたて　あげらんなえべな

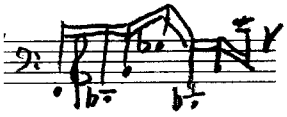


Ⓐ すこしはおどなしぐ　おらどシゲ子の言うごどきいで　おどなしくなたてええべな

Ⓑ おどなしぐなのならね　きかねぐなる

Ⓐ まま（飯）かせてもらたら 忘れねでごっつおさまと言わんなねべな

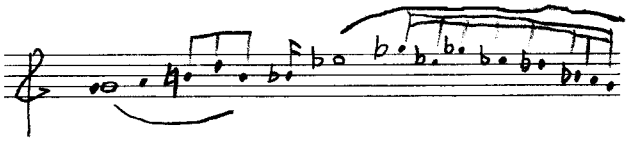
Ⓑ わすれだはあ



左] 全員 悪がったな

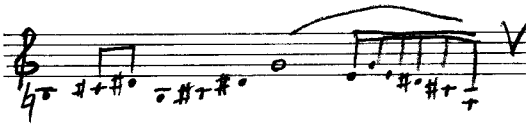
右] 全員 なしてだ

左] こだえあずかてもらて



右] なにも心配すっごどなえがらなれ　ばばちゃん

左] んだがあ



中央] 全員

pp

あ あ　あのあいで　あのこえで　（低くて出ない声）

ておくれ　のむと　つまや子　が

20

中央]

0 1 1 0 1 1

ゆき降り　ゆき舞い　ゆき落ちる　ひと世の

中央]

1 1 1 1 1

（ことばのリズム）

行くひと　去るひと　来るひと　おとずれるひと　死にびと　かみほとけのごと　眠りの底から　這いあがり

21

右]

ゆっくり 0

おごさま　おごさま　なにくて　おがる

中央]

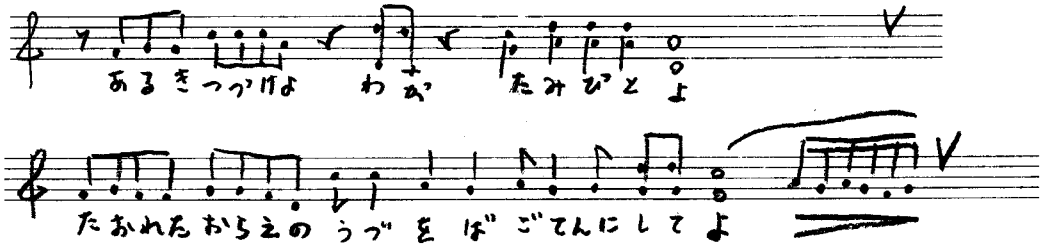
眠りもやらず　立ちつくし　ときとときとの（現時）（未来）　はげしい　りゅうりを　骨のまわりを　群れなして

右]

うらのはたけの　クワくて　おがる　おかたおこさま　なさけがあらば

sf

p



22

た〕こんなことをかいてほとけさまに申しわけございませんが　ここまでようやくくらしたかと思えばあげくのはてに夫にしにわかれ　ないてばかりいたんでは子供をそだて上げることはできないことです　冬になってお正月になるとじっかにとまりにいってはけごや　わらじ　になわなどつくり上げてそれをりようするのです　冬がおわり春になると田やはたけにでるときはぶらくでも一番はやくでてはたらく牛で田をたがやしたりするのです　牛はひとのようにじゆうにならないあばれてはふりまわされたこともあります

まあ　いろいろなことばかり　そうしてようやく五人の子供をそだて上げました